

日本語動詞否定辞「ない」の文法化について

岸本秀樹（神戸大学）

否定の意味を表す「ない」は、否定する文法マーカ（否定辞）として使用されるが、通常形容詞と同じ活用を示す。本発表では、動詞に付加される否定辞の「ない」が形容詞からスタートして、脱範疇化が関係する文法化により機能語として働くようになったと仮定できることを示す。また、これとは別の現象として「動詞+ない」の形態を持つ形容詞が日本語には多くあり（例えば、「つまらない」「しまらない」など）、「ない」には（現在では生産性がなくなっているものの）動詞につき形容詞を派生する派生接辞としての用法があったことが伺える。この形容詞の中に含まれる「ない」も、同様に、形容詞に起源があるとする、派生接辞の「ない」は、形態素化というプロセスによって形成されたと仮定できる。脱範疇化と形態素化は異なる文法化のプロセスであり、（動詞につく）否定の機能語としての「ない」と（「動詞+ない」の形態をもつ）形容詞内に現れる派生接辞の「ない」は、独立の文法化のプロセスにより成立したと考えられることを論じる。

具体的には、本論において、このような2つの文法化のプロセスが、特に、否定のイディオムを見ることによって検証できることを示す。脱範疇化と形態素化から生じた「ない」の用法が、否定のイディオム（「埒が明かない」「腑に落ちない」「始末に負えない」「一筋縄で行かない」などのいわゆる否定イディオムに残っていることを、いくつかのテスト（範疇を確認するテスト、統語的な独立性を確認するテスト、および構成素の可視性を確認するテスト）で検証し、そのことにより、否定辞の「ない」には、独立の形容詞となっているもの、形容詞の範疇特性を保ったまま接語となったもの、形容詞の接辞として機能するもの、形容詞の語彙的特性をなくしたが統語的な独立性を保つものの、少なくとも4種類のものが存在することを示す。さらに、これらのイディオムの形成時期を特定することにより、2種類の文法化の進行過程が時系列として確認できることを論じる。